

問題

以下の文章にある「ポスト資本主義社会」とはどのような社会か。
また、その社会でデザインのあるべき姿について、あなた自身の考えを述べなさい。

(字数制限なし)

十九世紀イギリスでの産業資本主義興隆期にマルクスが抱いた資本主義社会への疑問とその矛盾の分析と批判の根拠となっている彼の自然史における人類社会のとらえ方や、そこでの労働・生産・消費の論理に関する考え方の普遍性を理解し、二十一世紀の現代社会という場所でそれを受けとめ直すことで、筆者がかかわってきたデザイナーという現代資本主義社会の生んだ職能の持つ矛盾を明らかにし、それへの自己批判から本来あるべきデザイン思考の普遍的な論理構造を明らかにするとともに、生活者自身がその本来のデザイン思考によって実現を目指す目標としての社会と生活がどのような形であり、どのような必要条件を備えていなければならないかを描きだし、「ポスト資本主義社会」への方向性をつかみ取ろうというのが本書の趣旨である。

本書の第一部はモノづくり（本書では人工物を、自然物を含む「もの一般」と区別するため「モノ」と表現している）の歴史で、どのように生活者自身が持つ生活へのデザイン能力が失われてゆき、それが資本の能力として疎外されていったかを概略的に述べている。

第二部では、こうした歴史的過程の中で築き上げられてきた歴史的に特殊な職能形態である今日のデザイナーの労働内容をいわばデザイン行為の普遍的形態として論じている現在のデザイン理論の矛盾を明らかにし、その批判を通じて、本来の意味での普遍的なデザイン行為の論理を明らかにしようとする試みが述べられている。この部分はかなり専門性が高いので、一般読者にはかなり読みづらいかもしれないが、そこに込められている筆者の意図は分かっていただけだと思う。

第三部では、そのような普遍的な意味でのデザイン行為が生活者自身の手に取り戻された「ポスト資本主義社会」とはどのような社会なのか、そしてそのポスト資本主義社会のデザインに必要な条件とは何かについて考える。

こうした「あるべき近未来社会」やそこで実現されるべき本来のデザイン行為は一朝一夕に実現できるものではないし、たとえ実現できたとしても、その過程での予想を超えた状況や結果によって最初に考えられていた姿とはまったく異なる形になっていくのかもしれない。振り返ってみれば、歴史というものはつねにそうした過程を歩んできたからだ。

しかし先の見えない混沌とした時代に突入したいま、人類がこれまでの人類の苦渋に満ちた歴史から何を学び、そこから現在の矛盾に充ちた私たちの生活がいかにして生みだされてきたかを知ること、そこからはじめて見えてくる「あるべき社会」へのイメージを次世代社会像として描き出すことは「時間の先取り」であるデザイン思考の歴史的使命でもあるといえる。

(出典) ^{のぐちひきたか}野口尚孝著『ポスト資本主義社会のデザイン——生活のデザインを生活者自身の手に取り戻すために』(^{こうせいしゃ}皓星社)より